

## 第7章 教育の質の向上と改善に関する活動

### 1 現状

#### 1) 目標

教員は常に自己啓発を図り、自ら研鑽することによって、自身の教育能力をアップすることを要求されている。大学はこのための環境を整えていく必要がある。また、教員の教育能力開発のために組織的に取組めるシステムをもち、ボトムアップ的な改善を図れる状況の醸成に努めていかなければならない。

#### 2) FD 活動の経緯

本学の教育の質の向上と改善に関する活動は、主として FD 委員会を中心に行われてきた。平成 15 年度に FD 委員会が組織され、①教員の教育能力開発、②研究能力開発、③カリキュラム開発に関する事項について取り組んできた。特に平成 15 年度は PBL チュートリアル教育について全教員を対象に各種の教員研修会を開催し、平成 16 年度から看護学演習科目に PBL 学習を取り入れることができた。これらの取り組みの経緯は平成 17 年刊行の「本学の現状と課題」に記した。

同時に、授業改善を進めるために、学生による授業評価を導入する準備を進め、平成 15 年度後期授業科目に対し「学生による授業満足度調査」を開始した。また平成 16 年度からは、教員同士で授業を公開し、参観後に意見交換をする「学内教員による公開授業」を開始した。さらに、国内外で各種の研修活動を行った教員による報告会を開催し、研修内容の共有化を図った。これらの取り組みについて以下に述べる。

### 2 「学生による授業満足度調査」の実施

#### 1) 実施の概要

本調査は一般的に言う「学生による授業評価」の一つであり、その名称を「学生による授業満足度調査」（以下「授業満足度調査」と呼ぶ）とした。授業満足度調査は平成 15 年度から平成 17 年度まで実施した。この調査は、無記名による 9 質問項目に対する 5 段階リッカート方式による評価とし、本学において開講しているすべての講義・ゼミナール・演習科目について同一の質問項目による共通調査とした。

#### (1) 質問項目

質問項目は大きく 3 つの内容を含んでいる。第 1 は、科目内容の提示について、第 2 には、教員のあり方について、第 3 に、学生の反応についてである（表 7-1）。最後に自由記載欄を設けて感想や意見を自由に記述する形式とした。

表7-1 「授業満足度調査」に使われた質問項目

質 問 項 目		視点になるもの
1. 科目内容の提示	1. この授業の目的(達成目標)を明確に理解できましたか?	目標理解
	2. シラバスは的確に授業内容を表現していましたか?	シラバス整合
2. 教員のあり方	3. 授業をわかりやすくするために、教員の工夫が感じられましたか?	教員工夫
	4. 教員の板書あるいは資料の呈示は、わかりやすいものでしたか?	板書教材
	5. 教員の声の大きさ・話し方は適切でしたか?	話し方
	6. 教員は、授業回数・時間をきちんと守りましたか?	回数時間
3. 学生の反応	7. この授業で学ぶべき知識や技能が身についたと思いますか?	知技修得
	8. この授業の内容に対する興味・関心が深まりましたか?	興味関心
	9. 全体を通して、この授業に満足しましたか?	満足度

(2) 実施に関する教員間の合意

実施にあたっては、調査の①対象科目、②実施方法、及び③結果の集計と公表について、申し合わせ事項を教授会に諮り、教員間の合意を図った。

2) 実施状況

調査用紙の回収率は高く、学生の関心の高さがうかがわれた(表7-2)。しかし、回答は無記名方式であったためか、教員や大学に対する無責任なコメントがあったという意見が寄せられた。自由記載欄の内容はすべて各教員に返却し、委員会に一切の記録を残さないことにした。平成15年度後期授業と平成16年度前期授業の科目群ごとの集計結果は、平成17年に発刊された「本学の現状と課題—平成14年度～16年10月に至る本学の自己点検・評価—」にて公開し、それ以降の平成16年度後期と平成17年度の結果は表7-3のとおりである。

表7-2 「授業満足度調査」の実施状況

年度	平成15年度		平成16年度					平成17年度						
	1	2	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	7	8
学年	2	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	7	8
セメスター	2	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	7	8
科目数	16	15	15	16	12	30	10	15	17	12	14	14	1	3
科目担当者数(名)	41	28	15	31	18	34	14	15	32	17	26	14	1	4
調査実施者数(名)	37	28	13	25	16	30	14	13	19	15	19	10	1	2
調査実施率(%)	90.2	100	86.7	80.6	89.0	88.2	100.0	86.7	59.4	88.2	73.1	71.4	100	50.0
調査用紙回収率(%)	89.9	94.4	91.7	89.4	92.9	88.9	87.8	88.8	87.9	88.6	83.5	86.6	93.8	87.8

表7-3 平成16年度後期～17年度後期「授業満足度調査」の結果（満足度のみ示した）

	科目群	平成16年度後期	平成17年度前期	平成17年度後期
基礎科目	人間と文化	2.71	3.71	4.01
	人間と自然	3.41	3.95	—
	英語	3.99	3.84	3.68
	スポーツ	4.14	—	—
	基礎ゼミナール	4.51	5.00	4.39
専門支持科目	人間と生活	3.52	4.03	3.19
	人間と情報	2.38	2.68	2.92
	看護の基礎	3.63	3.51	3.83
専門科目	基礎看護学	3.97	3.71	3.91
	実践基礎看護	4.21	4.24	4.24
	母性看護学	3.95	3.65	3.81
	小児看護学	4.04	4.29	4.12
	成人看護学	3.96	4.19	4.01
	老年看護学	3.73	4.10	4.16
	精神看護学	3.11	3.42	3.47
地域看護学	3.77	3.76	3.97	
総合科目	特別講義	—	3.43	3.84

### 3) 各教科目群の学生満足度の比較

平成16年度後期以降の授業満足度を教科目群にまとめてその平均値を表4に示した。その結果、17科目群のうち11の群において満足度は上昇した。全学年全科目の平均値においても明らかであった（図7-1）。学年別に見た場合、2年生以上の専門科目ではわずかずつではあるが上昇傾向にあり、1年次科目については評価が伸び悩んでいた（図7-2）。これらの結果はいずれも、教員による授業改善の努力が反映したものと考えられ、短期間であったが授業満足度調査という取り組みが、授業改善に有効に働いたものと思われる。

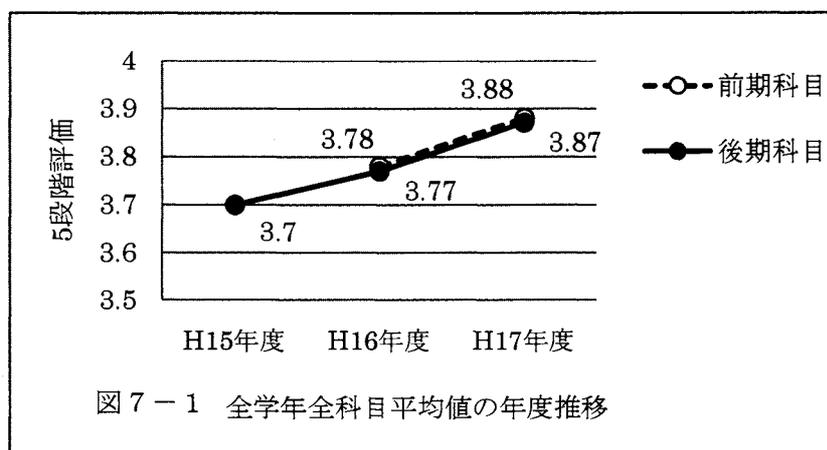


図7-1 全学年全科目平均値の年度推移

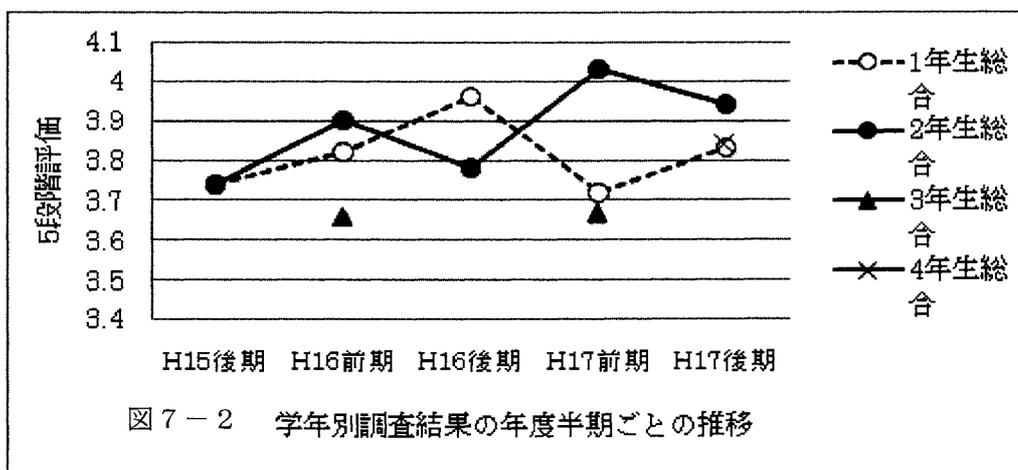


図7-2 学年別調査結果の年度半期ごとの推移

#### 4) 「授業満足度調査」に対する教員の反応

本学の完成年度に当たる平成17年度にて、全学年・全科目（実習科目を除く）に対して授業満足度調査が完了した。この時点までに、質問項目、自由記載、実施方法、結果の公開、フィードバックの方法等について様々な問題点が指摘されてきていたので、これらに対する教員の意見を聴取するため5段階リッカート方式によるアンケート調査を2回実施した（図7-3）。これらの結果は、すべての評点が3以上4に達するものもあり、教員が本調査を肯定的に受け止め、担当する授業改善に役立っていることが示された。

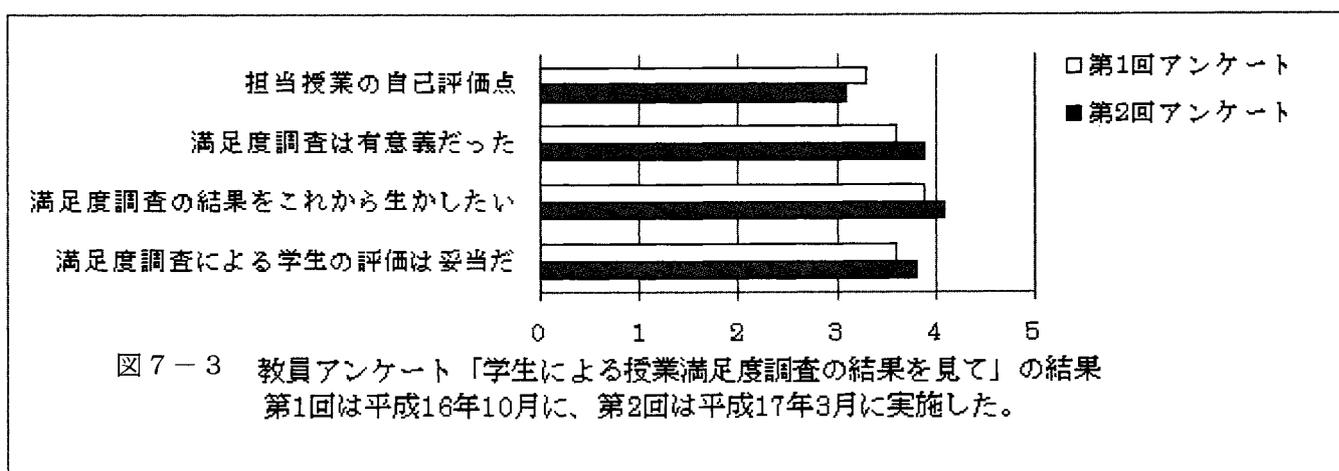
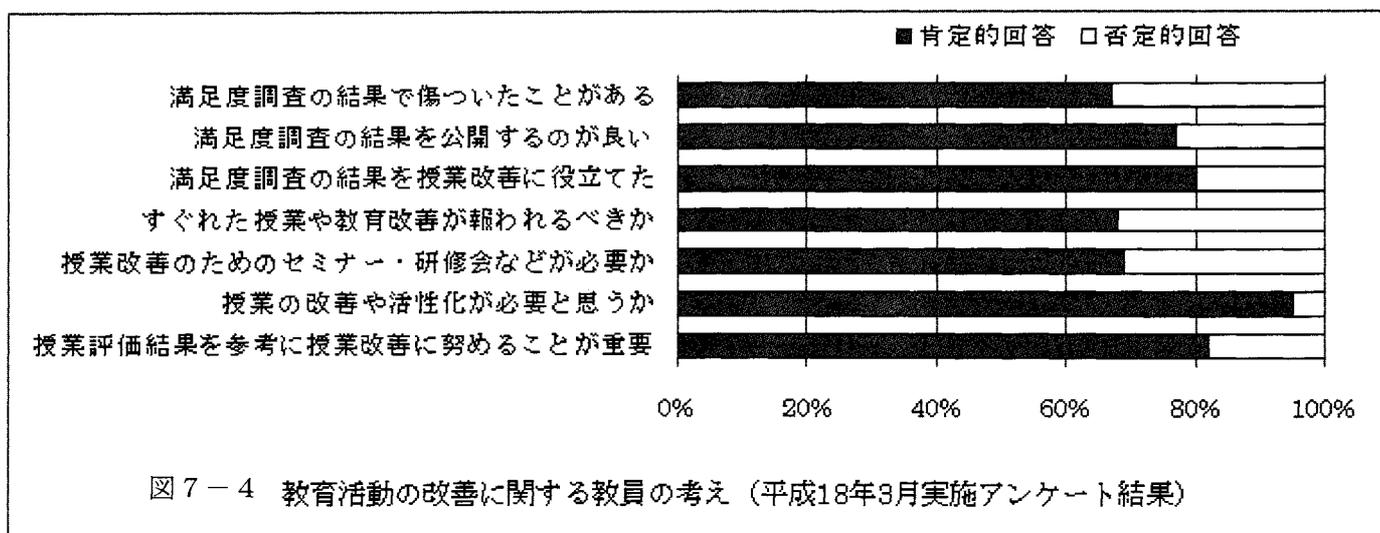


図7-3 教員アンケート「学生による授業満足度調査の結果を見て」の結果  
第1回は平成16年10月に、第2回は平成17年3月に実施した。

また、平成18年3月にも、教員に対し教育活動の改善に関するアンケート調査を実施した。その結果、授業改善に対する肯定的姿勢と、授業評価や研修会などの具体的な取り組みの必要性を感じていることが明らかになった（図7-4）。これらの結果を検討し、今後どのように授業評価を進めていくかを検討するため、平成18年度は調査を一旦中断することとした。



### 3 学内教員による公開授業

#### 1) 公開授業の概要

平成16年度より学内の教員同士で授業を公開し、意見交換を行ってきた。この目的は、教員が他の科目の教育内容、授業方法について知ることにより、自己の教科目の内容構成や授業方法の改善に資すること及び教員同士の情報交換と意見交換の場をつくることにあった。初年度は基礎科目の公開が多かったが、最近は専門科目の公開が増える兆しが見受けられ、今後の展開が期待される。平成17年度からは、授業参観の視点を記した用紙を配布し、また意見交換の記録用紙も準備し、記録保存している。

#### 2) 公開授業の実施状況

FD委員会から全教員に対し公開授業の希望調査を行ない、その結果をもとに公開授業の科目と日時を設定した。学生に対しては、特にアナウンスはしなかった。平成16～17年度は、形態機能学Ⅱ、臨床病理学Ⅰ、臨床病理学Ⅱ、化学、基礎ゼミナール6、英語表現法Ⅰなどの基礎科目、また小児看護学、国際看護活動論、基礎看護技術演習Ⅰ、看護行政などの専門科目の公開がなされた。平成18年度は、文化人類学、情報処理演習の他、老年看護学Ⅱ、地域看護学Ⅱ、精神看護学Ⅱ、看護技術論Ⅰなどの専門科目の参加が増えてきている。

公開授業終了後、その日のうちに参加者による意見交換会がもたれ、司会はFD委員の担当者が行った。意見交換にあたっては、ポジティブな発言を心がけ、授業の良い点、工夫を必要とする点など授業担当者の改善できる方向の内容とすることに留意した。

## 4 研修報告会等の開催

PBL チュートリアル関連の研修会は、平成 15 年度に 6 回実施したが、詳しくは平成 17 年に刊行された「本学の現状と課題」にまとめた。

このような研修会とは別に、国内で開催された各種研修会に参加した教員、また研究や研修で海外出張した教員による、全教員を対象にした報告会を開催した。平成 16 年の第 1 回報告会では、英国での地域看護と母性看護の研修を行った 2 名の教員による報告が行なわれた。その後も海外研修報告会は 4 回実施された。国内で開催された FD や学生生活に関する各種研修会に参加した教員に対しても、同様に報告会を実施し、研修内容の全教員への共有化が図られた。

また、米国から講師を招いた講演会を 2 回、国内の講師によるものも 2 回開催した。その他、特色 GP に関する勉強会を開催し、本学の教育の再認識と見直しの機会とした。

## 5 課題・問題点及び改善方針

### 1) 授業満足度調査

今回の調査の内容と実施方法について、多くの問題点が指摘された。例えば自由記載欄に無責任な意見が述べられ教員の授業への意欲がむしろ低下するという指摘があった。また、シラバスを学生が活用しているとは思われない現状にもかかわらず「シラバスについて」の質問項目があり、双方向的な授業が増え一方的な板書が少なくなったりコンピュータの導入により板書自体がなくなったりしている昨今にもかかわらず、「板書について」の質問項目があるという指摘や、学生自身の授業への取り組みについての質問項目がない、などの意見が寄せられた。

一方、実施上の問題点としては、毎 Semester 終了時に複数の授業満足度調査が行なわれるため、学生自身にも慣れが生じてきて、調査のマンネリ化が問題になってきた。また、調査に協力しない教員も増えてきた。

しかし 2 年半にわたって行なわれた満足度調査により、教員は学生の反応を真摯に受け止め、これからの授業改善に役立てていこうとする姿勢がみられ、本調査の有効性が示されたものと考えられる。一方で、教員は自分自身が担当する授業への自己評価には厳しいようである。

調査のマンネリ化や協力体制の弱体化の状況を改善するには、すべての学年やすべての教員あるいは科目を調査対象とするのではなく、改善目標を設定して調査対象を絞り込むなどの対応策をとることも必要かと思われる。あるいは、教員自身の態度や行動にばかり調査の焦点をあてるのではなく、授業の内容や進め方などの問題点を探るような質問項目に変えていくことも一つの方策である。また、一方的に学生が教員を評価するのではなく、授業は双方でつくるものという観点に立った内容の質問項目を盛り込むことも必要かと考えられる。

調査の実施率を上げるために、調査を授業担当者に任せずに、調査担当教員あるいは事務職員等の第 3 者に委託する方法が考えられる。これらの問題点を検討した結果、平成 19 年度以降「教科目評価」を実施する方向で準備を進めているところである。

## 2) 公開授業

教員同士が互いの授業の内容、進め方、学生の反応を直接知ることができ、この取り組みは授業改善に大変有効と考えられる。参加者からは、領域の異なる教員同士がお互いの授業内容を知ることができた、また授業方法の工夫点を認め合うことができた、という前向きな意見が寄せられている。あるいは、授業を公開することにより、学生の態度がいつもより積極的になるように思われるし、教員の事前準備の取り組みに改善が見られるなど、有効性が指摘される。

しかし、授業を公開する教員や参観教員が少数であることが指摘された。そこで、教員や科目の固定化を防ぎながらできるだけ多くの教員に参加してもらうため、FD委員のメンバーを中心に様々な領域の教員に声かけを行った結果、専門科目の授業公開が増加した。今後は、科目評価の分析結果を踏まえ、模範授業としての授業公開と意見交換会を実施するなど、授業の活性化と教育内容の充実を図っていきたい。